

苫小牧市総合教育会議議事録

会 議 名	第13回 苫小牧市総合教育会議
日 時	令和3年11月19日 自 14時00分 至 15時02分
場 所	市役所本庁舎5階第2応接室
出 席 者	市 長 岩 倉 博 文 教 育 長 五十嵐 充 教 育 委 員 佐 藤 郁 子 教 育 委 員 齋 藤 智 子 教 育 委 員 高 橋 憲 司
欠 席 者	教 育 委 員 岡 田 秀 樹
事 務 局	教 育 部 長 瀬 能 仁 教 育 部 次 長 山 地 吉 明 教 育 部 次 長 齋 藤 貴 志 教 育 部 参 事 池 田 健 人 教 育 部 参 事 桑 島 久 典 学 校 教 育 課 長 神 保 英 士 施 設 課 長 深 山 満 展 総 務 企 画 課 長 補 佐 千 葉 暢 総 務 企 画 課 主 査 山 口 元 総 務 企 画 課 主 査 矢 部 妙 子 総 務 企 画 課 主 事 安 藤 龍 慧 総 務 企 画 課 主 事 田 中 真 奈
協 議 事 項	(1) 苫小牧市立小中学校規模適正化「現状と課題」について
会 議 の 経 過 概 要	別紙のとおり

1 開会の宣言 . . . 14時00分
(岩倉市長) それでは定刻になりましたので、第13回苫小牧市総合教育会議を開催いたします。
コロナも落ち着いております、苫小牧では今日で51日連続、感染報告ゼロの日が続いておりますが、波のスタートというのは札幌由来の感染報告が昨年から多かったです、少し札幌でクラスターが発生しているようですので、より注意深く感染状況を見ておかなければならないというように思っています。子どもたちの学校生活、あるいは生涯学習の観点からも、早くコロナは落ち着いてほしいと思うばかりであります。今回は、本日、一つの方向を出すだとか、あるいは方針を決めるという場ではありません。課題になりますので、今後に向けてこの問題をどのように捉えていくのか、これから議論を重ね、ある時期には一定の方針、方向を決めなければならない、大変重要な問題ですけれども、その第一歩ということで、今日はこれからまずは事務局から資料に基づきまして現状と課題についての説明を聞いていただきたいと思います。
2 協議事項
(1) 苫小牧市立小中学校規模適正化「現状と課題」について
(岩倉市長) 苫小牧市立小中学校規模適正化「現状と課題」について事務局から説明をお願いします。
(教育部斎藤次長) 本日、お手元に苫小牧市立小中学校規模適正化「現状と課題」という冊子とA4の横の概要版をお配りしておりますので、併せてご確認いただきたいと思います。概要版に沿って説明させていただきますので、よろしく願います。
第1節、「現状と課題」の考え方についてですが、本資料は、教育大綱に掲げる「未来の社会をつくるひとづくり」の実現のため、学校規模適正化基本方針に定める

望ましい学校規模を踏まえ、教育環境の整備を推進するために本市の現状と課題を整理するものです。教育環境の整備の考え方として、学校規模適正化基本方針と小・中学校施設整備計画の2つの軸がございます。まず、学校規模適正化につきましては、子どもたちが集団の中で多様な人間関係を通して社会性を養うために必要な望ましい学校規模、小学校で12から24学級、中学校で9から18学級、これを確保するものであり、平成26年度に学校規模適正化地域プランを策定し、明德小学校の統合や苫小牧東小・中学校の移転改築について進めておりまして、現段階でおおむね一段落することになっています。規模適正化は本市の行政改革プラン、創革プランにも掲げており、議会等でも次の将来計画が必要ではないかとのご意見もいただいているところでございます。

次に、小・中学校施設整備計画につきましては、子どもたちが安全・安心な学校生活を送れるように校舎の改修や改築を適正に進めつつ、維持コストの抑制や平準化により、市の財政負担、市民負担の軽減を図るものでございます。平成24年以前の建物につきましては、使用目標をおおむね65年としておりまして、今後も継続して改築事業が行われることとなります。本資料につきましては、この規模適正化基本方針、施設整備計画を踏まえ、市内小・中学校が抱える学校規模や校区の設定、地域連携等における課題を整理することで、今後それらの解決に向けて学校や保護者、地域と検討協議を進めるための基礎資料となるものでございます。本市全体の現状と課題について3点上げていますが、児童生徒数につきましては、昭和60年の児童生徒数2万4,196人をピークに年々減少を続けており、本年度は1万3,132人、令和9年度には1万1,668人となり、現状から約1,500人程度減少する見込みとなっております。これに伴いまして、小・中学校の小規模化も進行し、今年度は過小規模校が3校、小規模校が11校となり、令和9年度には新たに5校が小規模校となることが予想されております。

続きまして、小中一貫・連携教育について、小・中学校の義務教育9年間を通して確かな成長を目指す苫小牧ALL-9の考え方により、小中の連携教育を推進してい

<p>るところですが、小学校6校において、1つの小学校から別々の2つの中学校へ進学することになるため、小中連携の上で課題となっております。</p>
<p>続いて、地域共同体制については、現在、勇払地区、清水・開成地区の市内2地区でコミュニティ・スクールを導入するなど、地域と一体となった学校運営を実施しているところですが、小・中学校区の不一致とともに、町内会の区割りと不一致となっている地域もあり、学校と地域コミュニティとの連携を図りにくい状況となっております。</p>
<p>続きまして、第2節、各地区別の課題について説明いたします。規模適正化基本方針では、市全体をAからEまでの5地区に分類しており、本資料では、郊外の勇払小中、植苗小中、樽前小学校をZ地区として地区別に現状と課題を整理しております。詳細は冊子をご確認いただきながら説明をしたいと思います。まず、冊子の5ページ、A地区、市の西部地区になります。明德小学校と錦岡小学校を統合し適正化を図っておりますが、現在、凌雲中学校が小規模化しているほか、小中ともに3校ずつあるにもかかわらず、学校の位置関係から小・中学校の校区の不整合が生じております。凌雲中学校は令和8年度から改築に向けた調査設計を始める計画となっており、予算要求を行う令和7年度までには方向性について検討を進める必要があります。続きまして、7ページ、B地区、中央区になります。小学校4校、山なみを除く中学校が2校あります。北星小学校の小規模校化のほか、小・中学校の校区の不整合が生じております。有珠の沢など地理的に通学距離の配慮が必要となるほか、複雑な校区割、町内会との整合など整理の難しい地区になります。続きまして、9ページ、C地区、中心地の北部になります。小学校4校、中学校3校ございますが、開成中学校の小規模化のほか、美園小学校からの進学先が2校に分かれており、校区の不整合が生じております。また、三光町の一部において美園小学校と緑小学校の校区分けが複雑となっております。地域住民から相談もあるなど、校区の整理が課題となっております。続きまして、11ページ、D地区、市内東部になります。ウトナイ小学校の大規模校化が進行しております。教室の用途変更などにより現在対応しておりますが、広く未利用地</p>

も残っているため、今後も人口増が見込まれる状況です。大規模校化の対応としましては、校舎の増築や改修等により教室不足を解消するほか、校区の見直し等の検討の必要があると考えています。続きまして、13ページ、E地区、中央南部でございます。小学校が5校、中学校2校ございまして、現在、末広町の通学区域見直し手続きを進めておりまして、苫小牧東小学校の小規模化の解消を図っております。苫小牧西小学校からの進学先が中学校2校に分かれており、小・中学校の校区の不整合が生じております。また、糸井小学校が既に全学年単学級の6学級となっているほか、将来的には大成小学校が小規模校となる見込みです。続きまして、Z地区、郊外になります。まず、勇払地区につきましては、人口減少が進み、今年度については小学校の入学者が2名のみとなっており、複式学級による学校運営をしております。今後、近隣校との統合や小・中学校の併設化など検討が必要な状況と考えております。続きまして、植苗小中学校につきましては、市内唯一の小中併置校でございますが、義務教育学校とすることで特色を生かした教育課程の編成や教員配置の充実など小中連携や一貫教育を推進できることも見込まれるため、検討の必要があると考えております。
ここまで市全体、各地域地区の現状と課題について説明いたしました。第3節、課題解決に向けた検討について説明をいたします。改めて学校規模適正化は、子どもたちに望ましい教育環境を提供するための一つの要素でございます。安全面やその他、人的・物的な支援、それから地域の特色ある学校経営なども含めトータルで考えるべきものだと考えております。課題の解決方法については、表に記載のあるとおり、学校の小規模化、大規模化にはそれぞれにメリット、デメリットがあり、第一には学校への支援や小・中学校間、地域との連携を強化するなど、学校運営の工夫により、それぞれの学校規模におけるメリットの最大化、デメリットの最小化を進めることでそれぞれの課題解決を図ることといたします。しかしながら、新たな設備投資を抑え、市民負担を軽減するという観点からも、安全面や通学距離などの課題がクリアされ、子どもたちによりよい環境を提供できるのであれば、学校の統廃合や校区の変更などの方向性を示し、学校、保護者、地域を交えて協議をしていきたいと考えております。

今後のスケジュールにつきましては、記載のとおりでございますが、早急に検討を要する状況や施設整備計画による改築の予定に合わせた優先順位をつけて検討していくことといたします。

以上、市全体、各地区の現状と課題について説明させていただきましたが、これを共有し、子どもたちの望ましい教育環境を考えていきたいと思っておりますので、よろしくお願いたします。以上になります。

(岩倉市長) それでは、この件について、まずは結論ではなく、印象、感想、あるいは今後に向けたお考えなどがあればお聞きしたいと思っておりますが、教育長から願いたします。

(五十嵐教育長) 今の説明について、若干の補足も含めまして、お話をしたいと思います。教育大綱に掲げる「未来の社会をつくるひとづくり」という目的の実現のために、学校規模適正化基本方針に定める望ましい学校規模というものを踏まえて教育環境の整備を推進していくということでございます。望ましい学校規模は、資料にもあります小学校で12から24学級、中学校で9から18学級と苫小牧市の場合設定しておりますが、これに縛られて、数字の基準を満たさないから統廃合をすぐ進めましょうという形に持っていく必要はあまりないのではないかと考えています。当然、基準はありますが、そればかりではなく、先ほど説明のあった3節の課題の解決方法にありますけれども、小規模の学校には小規模なりに、大規模の学校には大規模なりのメリットもありますし、当然デメリットもあるという中で、学校経営の規模によって工夫をしながらメリットを最大化していく、あるいはデメリットを最小化していくといった方法をいろいろ工夫しながらやっていくということと、最終的にはやはり学校の統廃合、それから校区変更見直しということで規模適正化を図っていくという結論も必要ということだと思っております。説明の中にありました議会等でも次の将来計画が必要ではないかというご意見もいただいているということについて、少し説明を補足します。今年の6月定例議会で改革フォーラムの越川議員から、将来計画が必要ではないかという質問がありまして、それに対して「学校規模適正化については非常

に重いテーマであるが、積極的に統廃合を進めるという考え方は今のところ持っていない。小規模校であっても新しい時代にマッチした学びの保障をしていくことを考えていかなければならないというように感じている。いずれにしても早期に課題の把握を行いたいと考えており、子どもたちに適切な学びの環境を整えることはもとより、
地域の核となる学校を共に支えていくためにも地域の声をよく聞いてしっかりと取り組んでまいりたい」と答弁したところであります。それで、私も思うのは、先ほども
言いました望ましい学校規模というものはありますけれども、それぞれ学校、地域には様々な歴史、それから学校が開校、配置された経過などがありますので、学校の適
正規のみ観点ではなく、地域の実情に応じた他のいろいろな方策、工夫といったものも含めて考えていく必要があると思っております。通学区域についても町内会な
ど地域の皆さんのご協力、ご参画をいただいて地域の一体性に配慮していくということも必要だと考えておりますので、通学区域も現状の区域というものを基本に置いて
考えていくということが必要かと思っております。いずれにしても適正規ありきで
どうしても拙速に進めるということではなしに、地域の皆さんの意見をしっかりと聞いた上で取組を進めていくことが大事ではないかと思っております。私からは以上です。
(岩倉市長) 高橋委員、お願いします。
(高橋委員) 現状と課題ということでお話をお聞かせいただきました。そのとおりに
かと思えます。いろいろな尺度で考えられますが、私としてはこれからの学校自体の
在り方の一つに、例えば地域企業とのつながりということも一つの観点に入ってくる
かと思えます。どうしても児童生徒数が少なくなるとともに、職員数ももちろん少
なくなってきます。働き方改革のことも含めて多様なお仕事を教員がしなければならない
現状というのを見逃せないところかと思えます。そういう中では、地域のつながり、
また地域企業とのつながりということを一つの観点に考えながら、学校の在り方とい
うことを検討してはいかがかと考えております。以上です。
(岩倉市長) 佐藤委員、お願いします。
(佐藤委員) ただいま、ご説明を伺い、教育長のご説明も併せまして、規模は確か

に大事だと思いますが、地域との関わり方で思いやり、それから歴史をやはり考えて、コミュニティーをつくっていくという先の考え方で教育も考えていったら良いのではないかと思いました。例えばクラブ活動やほかの発表など、学校単位で今までできたことが、学校単位でできなくなってくる。もう少し大きく広げた合同のような形として発表や競技など、形が変わっていくと思いますが、その際の教職員の関わりも随分、変わってくると思います。その中に地域の方も一緒に入っていただくなどして力を合わせていかなければ、10年先になくなるような学校が出てくるかもしれませんので、これはできれば避けて地域の学びの場所として残していきたいと思っています。

(岩倉市長) 齋藤委員、お願いします。

(齋藤委員) 今回このようにお示しいただきまして、苫小牧市の抱えている現状と課題についてよく理解することができました。先ほど教育長もお話していたように、適正化の数でばっさりと切ってしまうというのは、できれば好ましくないのではないかというお話がありまして、私もそれに同意したいと思っています。確かにある程度、数を指標にすることも大事かと思いますが、先ほどの話でもありましたが、地域それぞれでまとめられている学校の役割や在り方というのはやはり文化だとか、そこに住んでいる方の価値観だとかで変わってくると思います。数で切るのではなく、その地域に何が学校として求められているかということを考えながら、とても難しいことだと思いますけれども、地域の声を聞いて決定していただきたいと思っています。ただ、1点、私が思っているのは、今、中学校区を主にしてエリア会議をしています。エリア会議の中での問題点というのは、小学校、中学校が複雑に入り組んでいて、小学校の先生と中学校の先生が共有したいことがうまくいかないことも多々ある。少しそこがせっかくエリア会議を一生懸命やろうとしているのに、なかなか実情は難しいのではないかと思いますので、私としてはできれば1つの小学校から複数の中学校に分かれるのではなく、中学校と小学校がつながる形でできたらやりやすいと思っています。そしてまた、町内会の方たちもその中に入り、一緒にそのエリアを守っていくというような仕組みができたらいいなと思います。以上です。

<p>(岩倉市長) ありがとうございます。なかなか難しい問題ですけれども、今まで私が市長になり、学校の規模に関わることの中で1つだけ気になっていることは、文部科学省の指導により小学校は特に、1学年1クラスというのは教育上好ましくない、1学年最低2クラスは前提として、義務教育課程を考えるべきではないかということが文部科学省の考え方としてあるということを何度か聞いていますが、このことについて、指導室長、わかりますか。</p>
<p>(教育部池田参事) 文部科学省が出しているのは、複数学級の学年ということで、何学級以上というようなことは出していると思います。それはやはり多様な人間関係だとか教育活動の広がりというところからそういうことを出していると思います。</p>
<p>(岩倉市長) つまり1学年1クラスだとずっと同じ顔ぶれでいくようになりますよね。そのことの教育的なプラス・マイナスを言っているのでしょうか。</p>
<p>(教育部池田参事) そこも言っていると思います。</p>
<p>(岩倉市長) そういう縛りを考えたら、逆にもう何もできないのではないのかというところがありまして、ここはなかなか難しいと思っています。ただ文部科学省の話はやりなさいということではなくて、指導の範囲の話ですよ。</p>
<p>(五十嵐教育長) 一応、「標準とします」という書き方になっています。</p>
<p>(岩倉市長) 皆さんの意見を聞いていますと、これまでとは違い、地域との関わりの中で学校をどのように活かされるのかということ、学校区の見直しや、学校の統廃合、あるいは学校の廃止、これは手段としてあるけれども、そこに至る前にやはりやるべきことをしっかりやってみる必要があるのではないかという、聞く人が聞けば両論併記のような考え方になりますので、それでいいのかどうか。また、子どもの減り方の推計値が正確なのかどうかについても、推計値を基に考える場合に、その数字が本当に正しいのかどうか。0歳児をベースとしたらわかりますが、流入人口については予測がつかみませんので、そこを含めて考える数式というのはまだないですよ。ですから、そういう問題もあり、本当に難しい問題だと思います。いずれにしても現実的な問題として目の前にこれから出てくる問題ですので、総合教育会議としても、</p>

十分最大の関心を持ちながら、今、市教委が考えている考え方、方向性について、やはり皆さんからのご意見をいただきながら、修正すべきなのか微修正でいいのか、またはリセットが必要なのかということも含めて、これから議論が続いていくのではないかと思います。改めて教育長、先ほど、言い過ぎたってことはありませんか。

(五十嵐教育長) 今、市長も言われたように、工夫してできるのならば統廃合する必要もないだろうということと、そうはいつでも適正規模ということを念頭に置くのであれば、やることをやってもこれしかできないのであれば、やはり統廃合を進めていかなければならないという、まさしく両論併記ということですが、必ずこの規模でないと駄目だということではないと思います。先ほどの文部科学省の基準の話もそうですが、文科省の基準では、例えば小学校では12学級以上18学級以下を標準とすとなっています。文科省の示した基準に基づいて苫小牧市は小学校、12学級以上24学級ということで少し幅を持たせていますし、札幌市はもう少し絞った形としていたと思います。ですから、市町村によって、文科省の基準は基準として、それぞれの市町村で改めて適正規模をつくっています。そこを見直すということも場合によっては必要な議論にはなるかと思えます。また、やはり社会増減の部分の児童生徒数の見極めについても、ここの宅地を売るようになったから、もう少し人口増が見られないかといっても、それはなかなか難しいです、ということが結局いつも出ては消えとというのが、現実としては残念ながらあると思います。

(岩倉市長) 本当にウトナイ地区なども、学校を建てるという計画がマスコミに出た途端に周辺の土地がすごく売れ始めるようなところもあり、子育て世代が宅地を購入する場合にやはり学校の存在が大きいと、この2、3年でも感じることの1つです。今、一回りした中で、高橋委員、どうですか。特に東小学校の統合のときに意見をお持ちだった高橋委員、いかがでしょうか。

(高橋委員) あのと、私がお伝えしたのは、特に東小学校でPTAの役員もさせていただいた中で、まさに子どもたちがいる風景というのは、文化の一つとして良いものではないかということ。苫小牧の港まつりの踊りも東小学校でずっと続けていま

すが、ある一つの商店街を形成する中の小学校として、子どもたちがそこに行き交う姿というのは、私は非常に良いものだということをお話しました。人の流れということに関しては、誰かが指し示せることではありませんので、どこの地域にどういう人が集まっているかというのは物と人の流れになってしまいますから、ある程度そこに合わせた中でできることということしか、やはり言えないのかなというように考えております。また、札幌市の中心部にある札幌市立資生館小学校も、4校を1つにしたという、文化を1つのところに集めて展示をしていたりだとかして、いろいろな配慮をされながら新しい学校の整備というのをされているというようにお聞きもしておりますので、長広い苫小牧のまちの中で、ある程度、子どもたちが本当に通える範囲の中でできることということを中心に計画を進めていくしかないのかなというように考えております。

(岩倉市長) 佐藤委員いかかですか。

(佐藤委員) 私もコミュニティ・スクールという、コミュニティーを巻き込んで地域の子どもたちを教育するというのはとても良いことだと思いますが、地域性がありまして、地域の思いが非常に強いところは、かつて自分たちがこうだったという思い出の上にいろいろなものを重ねてつくり上げることがあるのではないかと思うことがあります。児童生徒が中心の教育のはずが、そうではないような声ですとか、方向性をつけようというようなことになりはしないかというのが、少し心配なこととしては思っておりました。ある意味、地域に力があるということは、存続する力もあるので、あくまでも児童生徒のための教育というところが、どこまで浸透するかということと、できれば、コミュニティ・スクールの実態、こういうことを行っていますということを他のところにも上手に周知できれば、もう少し特色をつけるとしても自分たちの考えだけではなく、進むようなことができるのではないかと思います。そうすると、統廃合まですぐにはいなくても独特な特色のある教育というのを基にすれば、少しは存続可能かというように思っていました。

(岩倉市長) そのような考え方の前提は、規模に関係なく、子どもたちにある程度、

義務教育課程ですから、同じような学びを与えるという、教える側の論理、あるいはスキルになっていくので、学校側はどうするかというよりも小規模であれ大規模であれ、教える側がしっかり均等に伝えていくべきものは伝えるという考え方にシフトしたほうがもしかしたら整理がしやすいのかもしれないね。

(佐藤委員) そうですね。

(岩倉市長) ただ、わからないのは、学校で例えば我々の時代のように5、60人いた時代の教育現場の学びの伝わり方と、今、30人、しかもそれは何クラスもあるわけではない、仮に1クラスか2クラスになったときの学びの伝え方、それは教える側の論理、集団生活という意味ではこれは数が少ないと物理的に制約はあるけれども、教育の原点からすれば、それはやはり教える側の感覚でいいのではないかという感じもします。齋藤委員はいかがですか。

(齋藤委員) 私は仕事柄、若いご家庭のご夫婦、お子さんがいる家庭の親御さんと話す機会や接する機会が多々あり、私の勤務先の場所柄もあるのかもしれないですが、あまり実際のところ拓勇、拓進側に家を建てる方はほとんどいらっしゃらなくて、錦岡方面ですとか有珠の沢方面ですとか北光町は近いといえば近いですが、結構、西側に建てる人も、今すごく増えています。また、東側でも拓勇、拓進側ではなくて沼ノ端中学校側に家を建てるという方も結構いらっしゃいます。読みがまた少し違うのかもしれないですけども、若い方も今は、拓勇地区だけに固執しているわけではないのかなという実感はあります。そして、教育行政とは少し話が離れてしまっていますが、どうして苫小牧市民が今、拓勇方面にお家を建てて、他の場所に建てないのかという分析をしていただかないと、まちづくりの観点からいっても、他の地区にも良いところがたくさんあるのに、やはりアンバランスになってしまいます。流行があるのかもしれないませんが、ある一定の年齢層のまちになってしまいますよね。そこの将来的なことなども考えたときにどうなっていくのかということですか、ここは教育委員会でするので教育行政のことを考えますけれども、まちづくりの在り方的なことも、全てつながってくるのではないかと思います。また、佐藤委員がおっしゃったように、これ

から地域とのつながり、学校も地域と一緒に、それがあまり入り過ぎると少し問題もあるということでしたが、やはり地域等とつながって学校をつくっていく。保護者は、ここの地域ではこういう特色のある教育をしている、こういう特色がある学校に行かせたいから、ここのエリアに住もう、東小は真ん中でアットホームなので、ここに住居を探そうですか。話が飛躍してしまいましたが、東京の中央区だとか都心部だと中央区の中に小学校が何校かあります。少しブランドがかかった学校もありますが、その中で中央区に住んでいる人は自分の好きな小学校を選ぶことができます。それは小学校の特色やカラーだとか歴史、伝統をここで学ばせたいということで、自分の校区以外の同じ区内の学校に通ったりもされていますので、苫小牧でもそういうようになると拓勇に固まることはないのではないかと思います。

(岩倉市長) 東西バランスという視点はもう15年も前から発信していることですが、30年スパンで見るか60年スパンで見るかで考えたときに、60年スパンで見ると、沼ノ端地区の人たちは、全部いろいろなものを西側ばかりにつくっていると。昔は、糸井と錦岡と高丘だけ地名を知っていれば語れたのが、まちがたくさんできて、公共施設もどんどん西側に建ちました。ところが、この20数年来、今度、それが全く逆になり、西側の人にしてみれば、なぜ東側ばかりに建つのかと。人口も今や3万人を超えます。ですから、そういう意味では60年スパンで見ればバランスは取れている。ただ、この20年で見たら、やはり情報の発信量も違いますし、また車の売れる車種も違う、高齢化と若い人たちとの差という、非常に苫小牧の東西アンバランスについてはまちづくりで難しいところです。私もずっとここで生まれて育っているので、町並みの変遷というのはわかっていますが、それはそれとしてそのことを言っても仕方がないので、これから近未来に向けてどう東西バランスを考えていくべきなのかという視点で立たなければいけないです。それと、指導室長に聞きたいのですが、今、大規模校と小規模校がありますが、それは1つ1つのクラスの単位もあると思いますけれど、先生にとって小規模校、しかも1クラスの人数が少ないほうが教育はやりやすいのか、文科省の指導要領を考えたときに、私は、少ないほうがやりやすいの

ではないかと。ただ、集団生活を慣れさせる教育は無理ですが、学習指導要領だけを考えたら、多いときのほうが大変ではないかと思うのですが、どうですか。

(教育部池田参事) 私は、クラス替えができないくらいの小規模校の経験もありますし、3クラス、4クラス、5クラスというようなところの経験もありますが、どちらかと聞かれると、どちらも良いところもあり、難しいところもあります。

(岩倉市長) そうすると、教育の本質から考えたら、大規模であれ小規模であれ、あまり関係ないということにならないですかね。

(教育部池田参事) ただ、小さい学校には小さい学校の良さがありますけれども、やはり適正な規模というのはあると思います。それが先ほどから言われているものだと思います。トータルで考えたときに、そこに近づいていくのは基本的には望ましいと思います。

(岩倉市長) 先生方には、誤解しないで聞いて欲しいのですが、教える側からすれば、本当はどうなのかというところの掘り下げが、何も無いなど。もし小規模校で集団生活、そういうことが足りなくなっているから地域との連携が必要と言われていたところもあり、コミュニティ・スクールのような発想が特に地方都市では出てきているのではないかという気もします。そこは非常に難しいところですが。

(五十嵐教育長) 個々の現場で担任を持っている先生にとっては、やはり人数が少ないほうが教えやすい、教えづらいというところというとなかなかないかなと思いますけれども、池田参事のように校長先生も経験されていて、学校経営ということで考えれば、やはり子どもたちはある程度の規模の中で、集団生活を送るところも含めて考えなければならないという考え方も出てきますので、あのような答えになってしまおうのかと思い、聞いていました。

(岩倉市長) それは集団生活の中での教育の学びも含めて、別な方法を考えれば良いのであって、学校そのものは大規模であれ小規模であれ、勉学というだけの意味では、小規模のほうがむしろ良いのではないかという気もするのです。これからは、少子化で昔のようなことはできないというところを、何でカバーするのかという新しい

発想で、地域の特性を生かしたカバーを考えて子どもたちにいろいろなことを経験させるというスタイルが必要かと思うのです。今の学習指導要領だけで考えても、答えは出ないのではないかと。ですから、1回リセットして考える必要があるのではないかとすら思います。市でコカ・コーラ主催の職業訓練などでも考えられない人数の人が来ますし、この前の、JC主催のお化け屋敷の企画にも、600組のオファーがあったという話を聞き、やはりそういうことの積み重ねで、学校ではできないことを学ばせるみたいなところを別途、考えていかない限り答えは出ないのではないかなと。ただ、学校が小さくなった寂しさみたいなのは、周辺にいる人は感じるかもしれませんが、むしろそれは子どもたちのためにプラスだと。要するに学びのスキルアップには絶対良いというようなところで、集団生活でカバーできないものを、では、別の方法で子どもたちをカバーできないのかという発想のほうが良いのではないかという気がします。だからといって統廃合、あるいは学校の廃止をすべきだって言っているわけではないですが、学びの根本の考え方が時代に合った考え方をしていく必要があるのではないかということです。あとは他に何かないですか。意見、あるいはこの次までにこういうこと調べられないかというようなことでもいいです。

(高橋委員) 特にGIGAスクール構想も含めてインターネットの環境というのが整備されて、学びだけを考えると教員からの直接指導だけではなくて、学びが自由になり、これは地域を超えてくることで、欧米だとかを見ても地域性を完全に排除した教育の在り方というのが1つあると。日本にいながらアメリカの授業も受けられるわけですから。小・中学校という世代別の年齢層の考え方の中で、やはり何を重視して教育を考えていくかという、単なる義務教育だけではなくて考えなければいけない時代に来ているのかと私は思っています。ですから、今の話でいくと児童生徒数を適正化という基に今まで分けてきましたが、積極的なまさに市長の言われた教育を考えたときに、新しい教育の在り方というのもある程度、前提にした、まさに多様化という形の中でいろいろなことがあっても、私はいいのかなというように思っていますので、ぜひそういうこともお考えになりながら、つくられたほうがいいのかと思います。

(岩倉市長) そうですね。他に何かないですか。
(齋藤委員) 本当にこれから教育の多様化ですとか、市長が言われるように、学校で無理なことは学校外の場で人との結びつきなどを学ぶという視点というのも本当に新しくて、なるほどと思いました。ただ、少し今、そういう流れに話がありますが、今回、お話も聞いて事前に資料も見て、自分の中で悶々としています。どうしたらいいのか、どちらにとってもメリットとデメリットがあると。ただ、私も、子どもの幼児教育の現場にいて思うことは、大人が教えてあげられることってほとんどないのですよね。子どもというのは子ども同士で学んで育ち合うと思うのです。勉強だけのことを考えれば人数が少ないところで先生が教えるほうがきっと細かくケアができて良いと思うのですが、やはり毎日のお友達との触れ合いの中で子どもというのは本当に心も体も成長して大きくなる。そういうお友達の数が少ない中で、外部でそういう触れ合いの場を持つということで、それで学校の小規模校のデメリットを補えるのかということが少し私の中では不安も感じます。ですから、皆さん、創意工夫をしてお勉強の面だけでなく、子ども同士の触れ合いをいかに多く持つ場面を持てるか、学校が無理ならほかの場所で毎日のようにどのようにして、子どもたち同士の育ち合いの場を提供できるのかというのを考えていかななくてはいけないと思います。
(岩倉市長) 私はどっちかという、現在、家庭、地域、学校を横一線で考えていることそのものが基本的に間違っていないかと。子どもを軸に考えると、やはり家庭の教育が少しノーケアになってはいないかと。それを言うと、それができれば1番良いけれど、できないから地域や学校でカバーしなければいけないと言うのですが、そこを甘んじていていいのかと。やはり家庭のベースがあり、そして地域と学校という縦で見えていかないと、平面で見えていたら考えが間違わないかという考え方です。そういう意味からすれば、確かにやはり数、毎日の日々の触れ合い、あるいは喧嘩、あるいは共に喜ぶ、涙を出すという集団の中での成長が今、少子化の中で物理的にできない時代だなと。では、そこを補填する何かを考えていかなければならない。そのほうが、新しい発想で子どもたちの集団の学びみたいなものを与えていかないと、学校だけで

全部完結して、あれもこれもしてくださいと望むことのほうが無理でないかと。では、家庭でといっても、今は共稼ぎの方が多いのでそれは無理というのも分かります。その中でいかに家庭のベースの中で子どもたちの触れ合う場というのを、例えば市の施策の中でもいろいろやっています。ある意味、児童クラブもそうですし、そういうところで触れ合いながら、そこは学校でもない家庭でもない別なところで、補填するものをつくっていかない限り、学校で全部しなさいと考えることのほうが無理があるのではないかという感じがしています。

(佐藤委員) まだ読んでいないのですが、PTAについて書かれている本が最近、出ていまして、市P連から始まり県P連、全国のPTAについて、何かというような、要するに暴露本的な裏話をまとめたものです。PTAがどれだけの力があるにもかかわらずよく知られていない団体だということも説明しながら、PTAの実態というのに迫りそうな本なので、そのうち読んでみようかと思っていますが、PTAとの関わりというのはどこまで深めるものなのかという、最近のお母様、お父様の働き方の状態によってどこまで学校とつながるものなのかと思っているときに、裏話の本が出ましたので、まだ読んでいないので何とも申し上げられないのですが、なかなか大きな影響がある団体だなと思いましたので、そのところから崩していくのも少しやり方としてはあるのかもしれないと思いました。

(岩倉市長) 学校側とPTAの関係は、10校あったら10通りの関係がありますから、なかなかこれは一概に言えないところもありますけれど、最近のPTAは大分変わってきた感じがしますよね。

(高橋委員) もう十数年やっていますが、PTAが変わったというよりは、学校が変わっていったことにPTAがどう追随していくかというようなことがあり、私は昔から学校にとって都合の悪いことはPTAで解決すればいいし、保護者たちの都合の悪いことはPTAで解決すればいいという、双方向の潤滑油のような役割がPTAであるべきだと思っているのですが、その学校や抱えている課題によって大分、違ってくると思います。ですからそれが必要に応じて変わってくればいいなと思うのが一つで

す。また、P T A自体の質というものが、先ほどの人数だとか働かされている職場の環境や家庭環境によっても大分変わってくるものですから、それが要は特色という言葉になってしまうのかもしれないです。だから一概に一律で良いとも悪いとも言えないというところなのかなと。

(岩倉市長) ただ、今、P T Aを組織しないところが増えているのですよね。

(高橋委員) それは特に都市型の学校ですね。

(岩倉市長) 札幌などは、P T Aがないというところも増えてきているという話を聞きます。苫小牧は全校ありますか。

(教育部池田参事) 全部あります。

(岩倉市長) 都会型のところは逆にP T Aをつくらない、補完するものはあるのかもしれないですが、おやじの会だとかいろいろできて、そういうのが補完する会としてというイメージがあったのですが、そうでもないみたいですよ。

(高橋委員) 要は核家族化が膨らんだ中で、責任を誰がどう追従できるのか、ないほうが良いという単純な話のような気が私はしています。ただ、ある程度余裕があったり、子どもたちや学校に関わりを持ちたいという親たちに関しては、やはりP T A活動を理解していると思うので、その辺が都市部とそうではないとことの違いが大分、出てきていると考えます。でも、本当に少なくなりました。数も少ないですし、もちろん金額も少ないですから、できる活動ももちろん少なくなっています。ただ、高校だけに限って言うと、北海道高等学校P T Aの副会長させていただいていますが、完全に共済という医療負担の中の回すお金としては非常に必要なところの担いがありますので、小・中学校、高校とまたそれぞれのP T Aの在り方が違っているというのは何となく理解します。

(岩倉市長) これからまた規模適正化、それにまつわる様々な教育の問題等々について、おそらくあと何回かやることになるかと思います。教育委員会では内部でまた少しずつ一歩ずつ進んだ方針等々があれば、次回、新しい方針を出してきて欲しいと思いますし、重要な大変厳しくも難しい問題ですから、教育委員の皆さんの意見をし

っかり市教委として参考にしながら、これからの業務に進んでいかなければなりません。そういう観点で、また別な問題でもいいですが、これだけはどうかということはありませんか。

(一同「なし」の声)

3 閉会の宣言・・・15時02分